

青年部研修旅行



石川県羽咋市へ行く!

青年部広報誌

かんらんしゃ

第122号

平成28年4月発行

石川県羽咋市は、能登半島の西の付け根にある人口2万4千人ほどの小さな市です。そのなかの一つ神子原地区は、神子原、千石、菅池の3集落からなり、高齢化率も高く(菅池の高齢化率57%)、離村率も激しい、いわゆる“限界集落”でした。そんな“限界集落”を見事に立て直した男こそが、羽咋市の職員であった高野誠鮮氏です。一体どんなことをして地域を蘇らせることができたのか。そんな思考力や行動力から学ぶことで、まちおこしのヒントにしたいと考え羽咋市を訪れました。



北陸新幹線で金沢を経て、電車で向かうこと一時間羽咋市に到着。着いて早々、目についたのはなぜか“UFOの模型”。どうやら羽咋市は、江戸時代の頃から空飛ぶ円盤が目撃されていたという伝承が残っていることから、UFOを使い町おこしをしている。目的とは違うが、こんなところにも町おこしの意識の強さを感じた。そんな街並みを横目に海辺のレストハウスで昼食を取り、いざ羽咋市役所へ。市役所ではお二人の職員がお出迎え。そのまま会場に案内され研修スタート。研修では実際に高野氏が行ったプロジェクトの説明などを伺った。高野氏は、全国の町おこしの成功例、失敗例を100事例以上を研究し、共通点を導き出し、



何十ページにもわたる確固たる理念を作り上げ町おこしをスタートさせた。基本戦略として、先ず人を動かす「メディア戦略」。そして、購買意欲をかきたてる「ブランド化戦略」。さらに、多くの人を訪れる「交流戦略」。羽咋市ではこれら3つの戦略から地域を蘇らせることに成功した。その中でも、ローマ法王献上米である“神子原米”を生み出したことはメディアに大きく取り上げられ、ドラマ化まで至った。学ぶべきはそこ。確固たる理念によって、小さな町がここまでメディアに取り上げられるようになったのだ。この研修で学んだことを活かし、宮代町の活性化に繋げたい。

羽咋市にて研修と視察

発行元: 宮代町商工会青年部

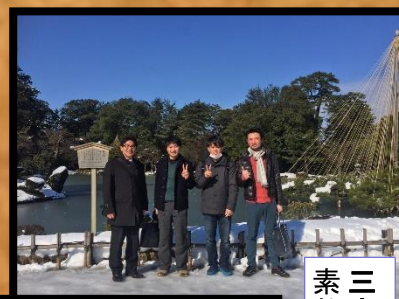
研修旅行の思い出



羽咋市内の様子。
”UFOのまち”アピール。千里浜レストハウスで昼食。



井 砂で作られた遠藤関。
出身は穴水。何故か羽咋に...



三大庭園、兼六園視察。
素敵なお庭でしたが、雪で。。。



直売所、神子の里。
神子原米、ゲットだぜ！！



懇親会での集合写真。
語り合いながら、石川グルメに舌鼓を打つ。



東茶屋街を視察。
夜はこんな感じ。風情あります。



... 羽咋の町おこし... 神子の里... 直売所... 神子原米... ゲットだぜ！！

編集後記

今回の編集では、石川県の魅力や羽咋市の町おこしの姿勢を感じて頂く為、写真を多く取り入れた編集にしてみました。広報誌を作りながら写真を見返してみると、青年部の仲間たちと一緒に行った楽しい思い出や研修で学んだことが蘇ってきます。この研修で学んだ事は町おこしは勿論、自分の仕事にも活かせる良い見本になりました。この経験を是非、宮代町の為にフルに活用していきましょう。また、このような研修を行っていききたいものですね。総務研修委員会の皆様、大変お疲れ様でした。（広報交流委員長 近藤）